

特別支援教育研究論文集

—平成24年度 特別支援教育研究助成事業—

研究協力：国立特別支援教育総合研究所

「青年期・成人期の発達障害のある人の自己理解に関する研究」
～小学校情緒障害通級指導教室を利用した本人への調査を通して～

横浜市小学校情緒障害通級指導教室追跡調査研究会

代表 永野 和子 横浜市立左近山第一小学校情緒障害通級指導教室担当
岡田 克己 横浜市立左近山第一小学校情緒障害通級指導教室担当
政金 真理 横浜市立寺尾小学校情緒障害通級指導教室担当
川上 賢祐 横浜市立平沼小学校情緒障害通級指導教室担当
冢田三枝子 横浜市教育委員会特別支援教育課主任指導主事
笠原 丈史 横浜市教育委員会東部学校事務所指導主事

平成 25 年 3 月

財団法人 みずほ教育福祉財団

目 次

要旨	1
I 問題	2
II 目的	3
III 方法	3
1 アンケート調査	
2 インタビュー調査	
IV 結果と考察	4
1 趣味や余暇の過ごし方について	
2 得意なこと、苦手なこと	
3 性格・特徴について	
4 学校生活について	
5 通級指導教室について	
6 現在の生活について	
7 ストレスへの対処について	
8 相談者、理解者について	
9 自分について	
10 将来の夢、未来の姿	
V 総合考察	20
謝辞	23

資料1：アンケート用紙

資料2：インタビュー協力者からのメッセージ

要旨：

通級利用者の追跡調査から、社会生活を維持するための個々の手立てや対処の在り方、自己の捉えや将来への見通しなどについて多くの示唆を得ることができた。今回の調査からは、彼らがこれまでに学んできた様々な社会的スキルを場に即して活用することで、社会生活への適応度を高めていることがうかがえた。しかし、全般的な適応能力は高まっているものの、コミュニケーション能力の弱さが、対人関係の構築や維持に影響を与えていることも明らかにされた。心情や雰囲気への把握のしづらさは、現在も半数以上が難しいと捉えており、その部分での苦手さは社会生活において躓きやストレスに結びつきやすい。自分の特徴や特性を踏まえた自分なりの対処方法が身についていくのは、高校期が大きな転機となっていることがうかがえた。また、ストレスの対処方法として通級利用者は、忘れることによる解決が難しく我慢することで対処する傾向が強いことも示された。通級利用者は、他者からアドバイスを受けること自体もストレスになっており、同年代の仲間との関係性に弱さがみられる彼らの相談相手は、両親や専門家が多かった。周囲から直接的に褒められたこと、労われたこと、認められたこと、喜ばれたことなどは実感として受けとめやすい。適切な自己理解を促し、自己有用感・自己肯定感が得られるように支援するためには、周囲からの的確かつ客観的、具体的な評価と励ましが重要である。このように本人の特性に関する共通理解のもと、周囲の人々が適切なかわりをもち支援していくことが求められる。

「青年期・成人期の発達障害のある人の自己理解に関する研究」

～小学校情緒障害通級指導教室を利用した本人への調査を通して～

I 問題

横浜市における情緒障害通級指導教室の現状

横浜市立小学校の発達障害等を対象とした通級指導教室は、昭和 47 年に自閉症等の児童を対象とした「通級制情緒障害学級」として始まった。その後、平成 5 年の通級制度の法制化により、「情緒障害通級指導教室」（以下、「情緒通級」）へ名称変更し、さらに平成 18 年度からは学校教育法施行規則の一部改正に伴い、LD、ADHD も通級指導の対象と位置づけられた。そのため、自閉症等の他、LD、ADHD のある児童も通級している。通常の学級に在籍する発達障害等のある児童を対象に、自立活動を中心として、必要に応じて一部教科の補充的指導を行っている。自己肯定感を維持することにより心理的な安定を図ることは、個々の能力や特性を十分に生かすことにつながると考え、主に、低・中・高学年、また個々の発達段階に応じて、ソーシャルスキル課題をはじめ具体的な活動を通して、自分の特性・特徴、考え方や行動の傾向等について知る、自他の良さについて理解し認め合うという学習を行っている。学習内容が日々の生活で生かされるように、在籍校や家庭との連携を図りながら取り組んでいる。平成 24 年度、横浜市立小学校の情緒通級の利用者は 780 名を超えている。

平成 10～11 年度に中学生から高校生の年齢域にあった小学校の情緒通級を利用した人（以下、通級利用者）を対象に、保護者へのアンケート調査により追跡調査を実施した。当時は横浜市立小学校約 350 校中、情緒通級の設置はわずか 6 校であった。そのため通級を利用する児童の数も少なく、調査対象となる通級利用者も限られた人数であったが、調査結果からは、保護者が捉えた通級利用における意義、通級利用者のその後の学校生活や家庭生活での適応状況や課題等、一定の示唆を得ることができた。その後、通級利用者の追跡は各学校に委ねられ、特に義務教育終了以降の通級利用者の動向や予後については市全体として十分に把握できていない状況にある。前回の調査対象となった通級利用者のほとんどは通級制度の法制化以前に情緒通級を利用していたことになる。前回の調査から 10 余年、特別支援教育が開始され 5 年が経過し、現在の制度下での通級利用者の動向や予後を把握することは、横浜市の情緒通級としての成果や今後の通級指導の在り方を検討する意味においても喫緊の課題である。

発達障害のある人の自己理解

平成 19 年度スタートの「特別支援教育」により、発達障害のある子どもに対する教育環境も徐々に整えられつつあり、また発達障害への社会的な認知度も高まってきている。教育現場では、コミュニケーション能力や対人面も含めた社会性の向上、適応行動の習得や定着を目指し、子どもの認知特性を踏まえた指導が重要視されている。しかし、個々の特性が時に社会生活上に何らかの困難を引き起こすことがあり、また全般的な知的発達には遅れがみられないため、周囲からの厳しい評価や軋轢の中で、心理的な不安定さや自己肯定感の低下がみられる子どもたちも多い。

社会生活においても本人の良さや能力を十分に発揮できず、不安定な状態に陥りやすい状況にある人たちも多い。そこから派生する二次障害という問題を防ぐためには、周囲の正しい理解とともに、本人の適切な自己理解が必要であると考えられる。

発達障害のある人の自己理解については、菊池（2004）は自己理解の在り方そのものに自閉症の特徴

があり、他者との関係性の中での情動的なやりとりに関する彼らの特異性にかかわる問題が不可分に自己認知に結びついていると考えられると指摘している。また、滝吉・田中（2011）は、広汎性発達障害者は他者との関係性の中で自己を理解することが難しいと考えられるため、彼らに対し自己理解という視点からの支援が急務であると述べている。岡・小野（2010）は自分の個性を把握しておくことは、「自己認知支援」（自分の強みを知り、自信をもち、更に自分の弱点も認識して社会的なスキルを身につけ、自分を大切にする生き方の支援）を行っていく上で重要なポイントになると指摘している。

このように、自分にとって適切、且つ必要な環境や支援を選択していく際に、自己理解は重要な要素となると考える。そこで、本研究では、本人へのアンケート調査を通し発達障害のある人の自己理解を研究テーマとしてとり上げることにした。

II 目的

本研究は、小学校情緒障害通級指導教室の利用者に対する追跡調査（「アンケート調査」及び「インタビュー調査」）を通して、発達障害のある人の自己理解の様相が高校期やそれ以降の大学、就労を含めた社会生活における適応とどのように関連するかを考察することを目的とする。

III 方法

1 アンケート調査

- (1) 方法：質問紙を郵送により実施。
- (2) 対象：横浜市立情緒通級を利用した16歳から26歳の187名（以下、通級群）と、比較検討のための18歳から26歳までの大学生141名（以下、一般群）
- (3) 時期：平成24年7月～9月
- (4) 内容
 - ①趣味や余暇の過ごし方について
 - ②得意なこと、苦手なこと
 - ③性格・特徴について
 - ④学校生活について
 - ⑤通級指導教室について
 - ⑥現在の生活について
 - ⑦ストレスへの対処について
 - ⑧相談者、理解者について
 - ⑨自分について
 - ⑩将来の夢、未来の姿

2 インタビュー調査

- (1) 方法：対象者の指導担当者6名が半構造化面接により実施。
- (2) 対象：インタビューに応じてよいと回答した者のうち性別年齢を考慮して10名を選定。（高校生男子2名、大学生男女各2名、社会人男子4名）
- (3) 時期：平成24年9月～10月
- (4) 内容：アンケート調査の回答に基づいた具体的内容

IV 結果と考察

通級群の回収率は51%、有効回答数95であった。

以下、アンケートの調査項目(①～⑩)に従って、結果及び考察をまとめる。但し、5『通級指導教室について』は、通級利用に対する調査項目のため一般群の回答は求めている。

尚、通級群の結果の分析については、記入漏れ等の理由から項目により回答数が異なる場合がある。

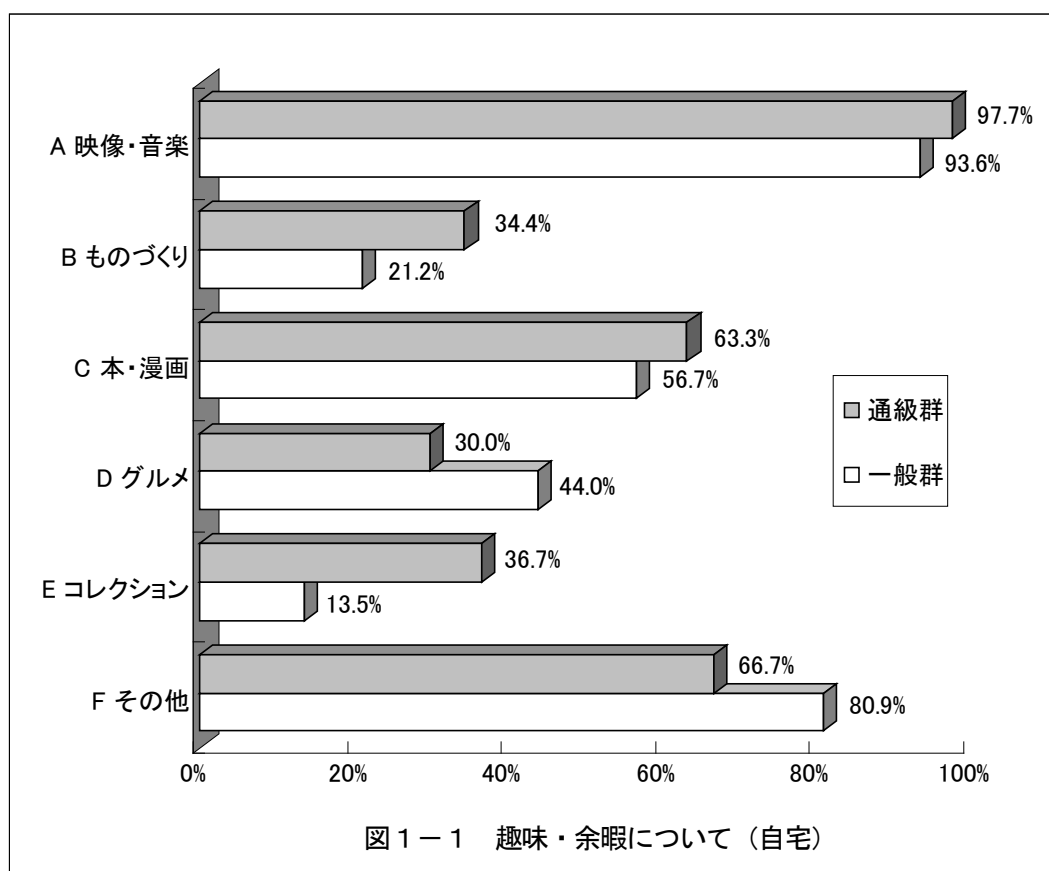
1 趣味・余暇の過ごし方について

(1) 休日や自由な時間の過ごし方

① 自宅で過ごす

『現在、休日や自由な時間は何をしていますか』という問いに対し、『A：映像・音楽を楽しむ』『B：ものづくり活動をする』『C：本や漫画を楽しむ』『D：グルメを楽しむ』『E：コレクションを楽しむ』『F：その他』それぞれの項目に具体的な例を挙げての回答を求めた(図1-1)。

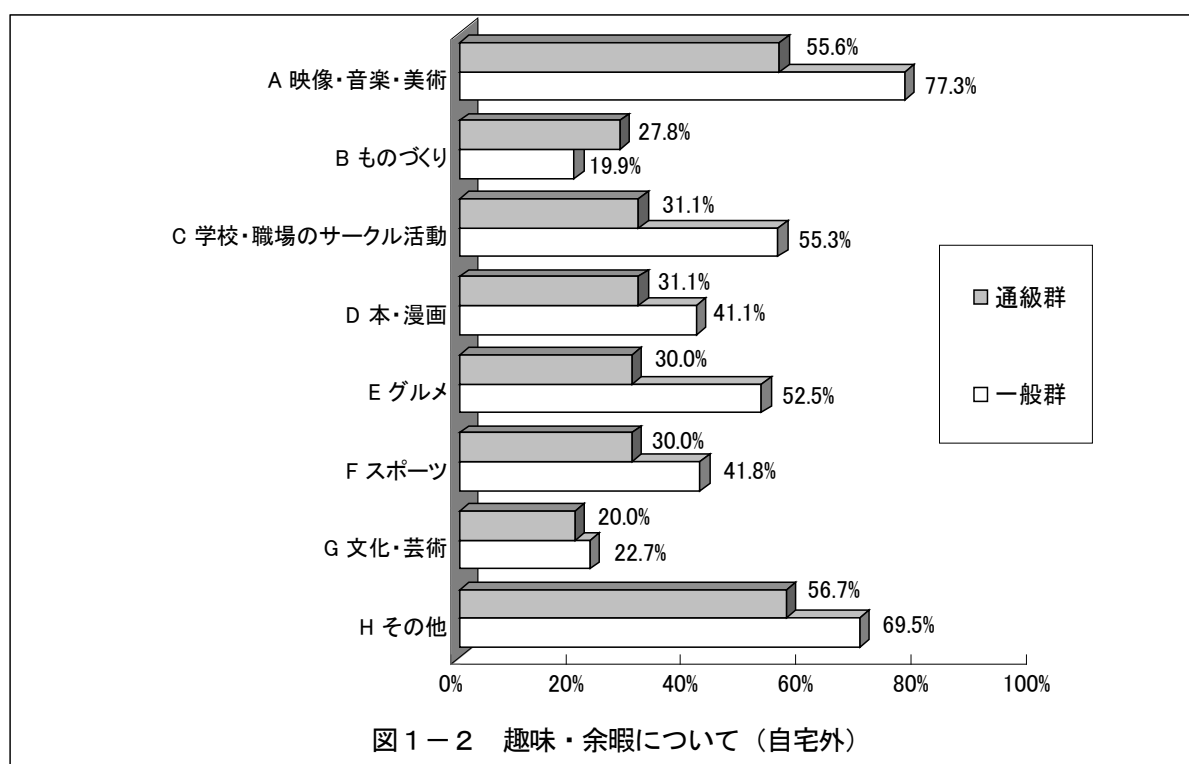
『A：映像・音楽を楽しむ』(97.7%)が圧倒的に多い。その内容としては、テレビ・DVD・パソコン・ゲームが中心である。次いで、『C：本・漫画などを楽しむ』が63.3%となっている。一般群の場合には、同様に『A：映像・音楽を楽しむ』が93.6%で最も多く、次いで、『C：本・漫画などを楽しむ』が56.3%となっている。通級群と一般群を比べると、『E：コレクション』(通級群36.7% 一般群13.5%)の割合が2.5倍以上とその差が顕著であり、特徴的といえる。『F：その他』の項目についてみると、通級群、一般群ともに、『寝る』(通級群42.2% 一般群65.2%)が最も高い。



②自宅以外で過ごす

『A：映像・音楽・美術を楽しむ』『B：地域のサークル・教室で活動する』『C：学校や職場の部活動・サークル活動をする』『D：本や漫画を楽しむ』『E：グルメを楽しむ』『F：スポーツを楽しむ』『G：文化芸術を楽しむ』『H：その他』それぞれの項目に具体的な例を挙げて回答を求めた。

『A：映像・音楽・美術を楽しむ』(55.6%)が最も多く、BからGの項目については、どれも30%程度の割合となっており、自宅で過ごす場合と比べて大きな偏りはみられない。『H：その他』の項目についてみると、『ショッピング』(28.9%)、『ゲームセンター』(22.2%)、『旅行』(17.8%)の順となっている。一般群と比較すると、多くの項目で通級群の割合は低く、通級群は一般群に比べて、自宅で余暇を楽しむ傾向があると思われる。



(2) 最も楽しいもの

最も楽しいと感じることは、『ゲーム』(22.5%)、次いで『パソコン』(21.3%)、『サークル・部活動』(12.5%)、『音楽鑑賞』(11.3%)となっている。一般群は、『サークル・部活動』(11.9%)、次いで『ショッピング』(11.2%)、『楽器演奏』(8.2%)、『寝る』『DVD, 音楽鑑賞』『読書』(6.0%)となっている。

一般群と比べると、通級群で回答が集中した『ゲーム』『パソコン』は、一般群では全体の3~4%にとどまっている。また、一般群にあって、通級群になかった項目としては、『友達と遊ぶ』が挙げられる。逆に、一般群になかった項目は『コレクション』であった。通級群が最も楽しいと感じる活動は、【(1) ①休日や自由な時間の過ごし方】の結果を裏付けるように、自宅内において一人で行えることの割合が高かった。インタビュー調査からも、自分の興味のある分野についてはパソコン関係の話題が多かった。

(3) 趣味・余暇を共有できる人

通級群の83.6%が余暇を共有する人がいると答えている。一般群は90.0%であり、顕著な差はみられなかった。ただし、通級群が最も楽しいものとして答えた趣味や余暇の過ごし方は、一人で行えることが多かった。

2 得意なこと、苦手なことについて

(1) 得意なこと（自由記述）

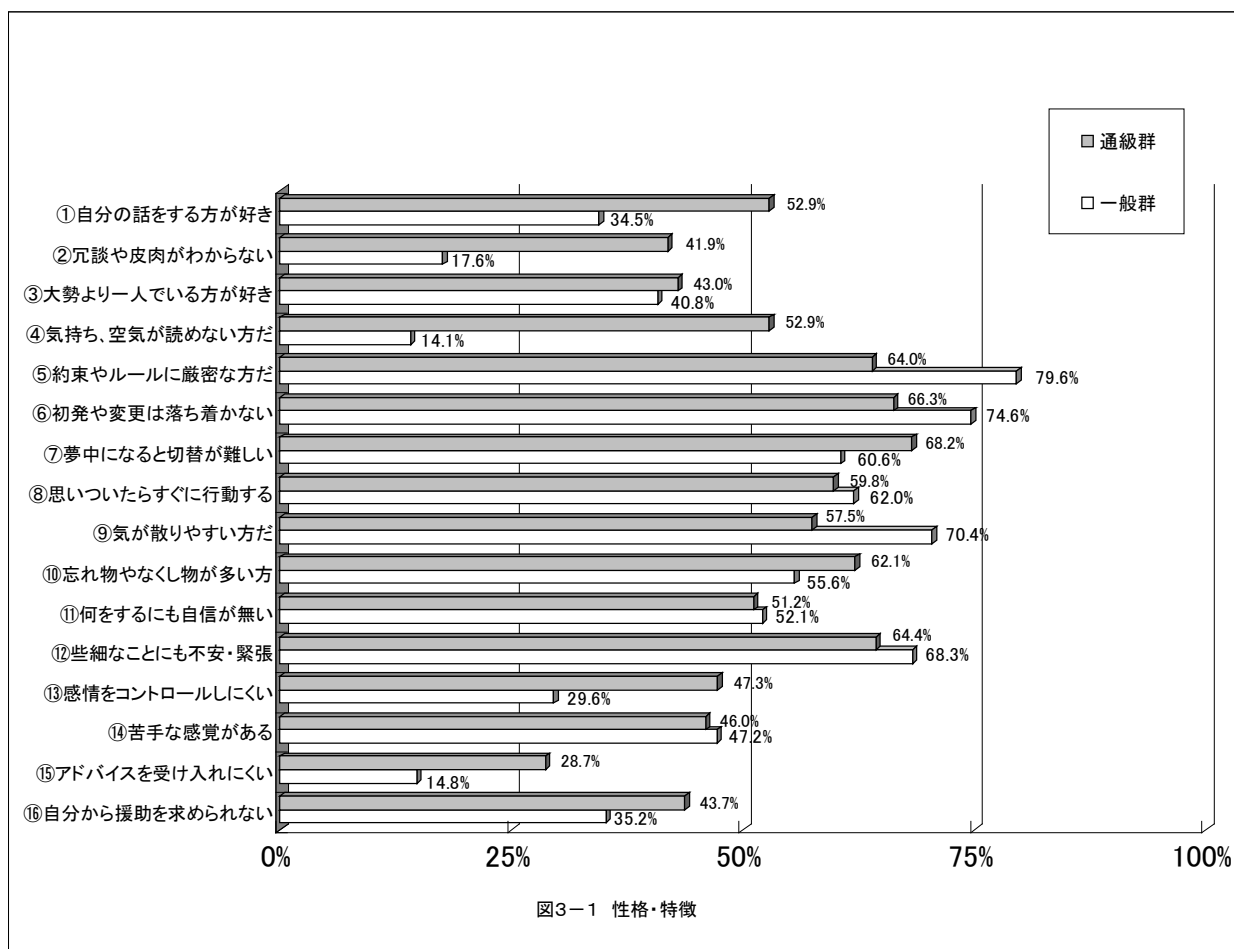
『得意なことがある』という回答は、通級群は59.5%、一般群は60.3%であり、両群間に差はみられなかった。通級群の内訳では、『パソコン』と『楽器演奏』（ともに14.0%）、その他『水泳』『工作』などが挙げられており、『小さいころから習っていたから』という理由が多かった。一般群の内訳では、『球技・スポーツ』（26.5%）、『楽器演奏』（22.9%）、その他『人前で話すこと』『水泳』となっている。一般群と比べると、通級群では『球技』や『人前で話すこと』等、直接人とのかかわりややりとりを要すると思われる項目は挙げられていない。

(2) 苦手なこと（自由記述）

『苦手なことがある』という回答は、通級群では83.8%、一般群では80.0%であり、両群間に差はみられなかった。通級群の内訳をみると、『学習・勉強に関すること』（26.9%）、次いで『対人関係・社会性に関すること』（23.9%）、『コミュニケーションに関すること』（17.9%）、『運動に関すること』（10.4%）となっている。一般群の内訳は、『対人関係・社会性に関すること』（27.5%）、次いで『運動に関すること』（22.0%）、『学習・勉強に関すること』（13.8%）、『コミュニケーションに関すること』（6.4%）、となっている。通級群で苦手なこととして挙げた『対人関係・社会性に関すること』と『コミュニケーションに関すること』との割合の差はみられなかったが、一般群では『対人関係・社会性に関すること』の割合は高かったものの、『コミュニケーションに関すること』はそれほど高くないという結果がみられた。その背景としては、通級群は『会話の入り方や話しかけ方などルールが分からない』『語彙力の不足』『相手の気持ちを汲み取ることが苦手』など、自身のコミュニケーション能力の弱さをうかがわせる理由が挙げられていた。インタビューからも「会話に入るタイミングが分からない。」「自分は丁寧に伝えているのに（会話の内容を）相手が理解しない。」「おどおどしてしまう。」「人の目を見て話をするのが難しい。』といった発言がみられ、コミュニケーション能力の弱さが、対人関係の構築や維持に影響を与えていることが推察される。しかし一般群ではコミュニケーションスキルに問題を感じることは少ないにもかかわらず、『緊張しやすい』『ネガティブに考えやすい』などの自分の性格や特性の他、周囲からの評価や距離感など、他者の視点を意識した理由が挙げられていた。

3 性格・特徴について

全16の性格特徴を表す項目について、『思う』『思わない』の二択で回答を求めた。通級群による特徴・特性の捉えをより明確にするため、設問項目の②③④⑩⑬⑮⑯を反転の表現として一般群との比較をグラフ化した（図3-1）。



通級群の60%以上を示した項目は、⑦『夢中になると切替が難しい』(68.2%)、⑥『初発の事柄や変更は落ち着かない』(66.3%)、⑫『些細なことにも不安や緊張を感じる』(64.4%)、⑤『約束やルールに厳密である』(64.0%)、⑩『忘れ物やなくし物が多い』(62.1%)である。これらについては一般群との比較において、⑤の項目以外には顕著な差はみられなかった。

次に通級群と一般群との回答率に15%以上の差がみられる項目について挙げてみる。最も大きな差として表れた項目は④『気持ちや空気を読めない方だ』(通級群：52.9%、一般群：14.1%)であった。言い換えれば、一般群では85%以上が「相手の気持ち、周りの空気を読む方だ」と考えており、両群間で特徴的で明確な違いがみられた項目であった。次いで、②『冗談や皮肉がわからない』(通級群：41.9%、一般群：17.6%)、①『自分の話をする方が好き』(通級群：52.9%、一般群：34.5%)、⑬『感情をコントロールしにくい』(通級群：47.3%、一般群：29.6%)、⑤『約束やルールに厳密である』(通級群：64.0%、一般群：79.6%)となっている。⑤の項目のみ一般群の回答率の方が高かった。④は両群間の比較において最も著しい差が出た項目であるが、一般群においては最も回答率が低い項目であった。

通級群の回答率が最も低かった項目⑮『アドバイスを受け入れにくい』(28.7%)においては、一般群(14.8%)との差は15%未満であるが、通級群が他者からの助言を受け入れにくいと感じている割合は、一般群の2倍近くである。

また両群間の回答率に差がみられなかった項目は、⑪『何をすることも自信が無い』⑭『苦手な感覚がある』であった。

以上の結果から、通級群で回答率の高かった項目は⑦『夢中になると切替が難しい』、⑥『初発や変更

は落ち着かない』、⑫『些細なことにも不安・緊張を感じる』、⑤『約束やルールに厳密』と続くが、これらは変化や変更に対して臨機応変に対応することの苦手さとして捉えていることが推察される。

インタビューにおいて、「一度失敗をするとトラウマのように残る。表面的には大丈夫だけど…」 「できるかもしれないけど、失敗すると思うと…」 「仕事の順序や、予定より時間がかかってしまうことには緊張を感じる」等、これらの項目に関して、失敗に対する耐性の弱さや脆さが垣間みられる発言もみられた。様々な経験や学習を通して社会的な適応度は高まっても、躓きへの弱さやストレスは、不安や不快感として残りやすいことが推察される。

④『相手の気持ち、周りの空気を読めない方だ』(52.9%)、②『冗談や皮肉がわからない』(41.9%)

の項目は、社会的な暗黙の了解にかかわる部分であり、その部分での苦手さは社会生活における躓きやストレスにつながりやすいことが推察される。④及び②は心情や雰囲気、また言外の意を汲むといった把握しづらい事柄であり、現在も④については半数以上が、②についても4割以上が「難しい」と回答している。社会性や対人関係維持に必須と考えられるこれらの項目について、通級群は一般群と比べてその割合が高いことから、年齢が上がっても、心情や雰囲気、言外の意を汲むといった事柄については、彼ら自身が難しさとして捉えていることがわかる。インタビューの中では、「不快と感じる明確な言葉であれば皮肉と捉えられるが、空気とはどのようなことかがわかりづらい」との発言もみられた。具体的な言葉として話されていることについては、経験的・慣用的な理解が深まるとも考えられる。

①『相手の話を聞くよりも自分の話をする方が好きである』(52.9%)では、半数以上が自分の興味関心ある事柄での話をしやすい傾向にあるとみられる。その背景の一つとして、「自分の興味の無いことは全般的に会話の内容がわからない」、「実際、自分は話を聞いているようで、あまり聞いていなかったりする」「人の言っていることを気にしてしまう」といった、他者の話の理解や受けとめに関する難しさがあることがインタビューから垣間みられた。一般群(34.5%)は通級群に比べ、相手や場の状況に応じて、臨機応変に話し手と聞き手とをシフトしながらやりとりする中で、より共感的で相互性のあるコミュニケーションの経験が多いと思われる。

⑬『感情をコントロールしにくい』(通級群:47.3%、一般群:29.6%)では、一般群と比べるとその難しさはあるものの、通級群も半数以上が感情をコントロールできると考えている。インタビューにおいても「怒った時の切り替えは高校生になったぐらいからできるようになった」「大暴れをしても無駄なことが多いと学んだ」「感情をコントロールできない訳じゃない」などの発言がみられる。その一方で、「一度落ち込むと長い」など、躓きへの弱さや気持ちの切り換えの部分での難しさがうかがわれる。

⑮『アドバイスを受け入れにくい』の項目の回答は、28.7%であった。つまり、通級群の70%以上が「助言の受け入れができる方だ」と回答していることになる。インタビュー調査においても助言の受け入れに関する言及が比較的多かった。「それらは必要なことであり、受け入れたら求めたりしている」という言葉が聞かれた。特に社会人は困り感が仕事や業務に関わることで推察されるため、「助言は助かる」「困った時に気づいてほしい」等の発言もあった。一方、「助言は相手が一方的に言っていることだと感じてしまう」「人の話を受け入れないで困ったことはない」「理論的に納得できなければ受け入れられない」等の発言もあり、アドバイスの受けとめ方や受けとめる背景にも、個々に独自の考え方や捉え方がみられる。

4 学校生活について

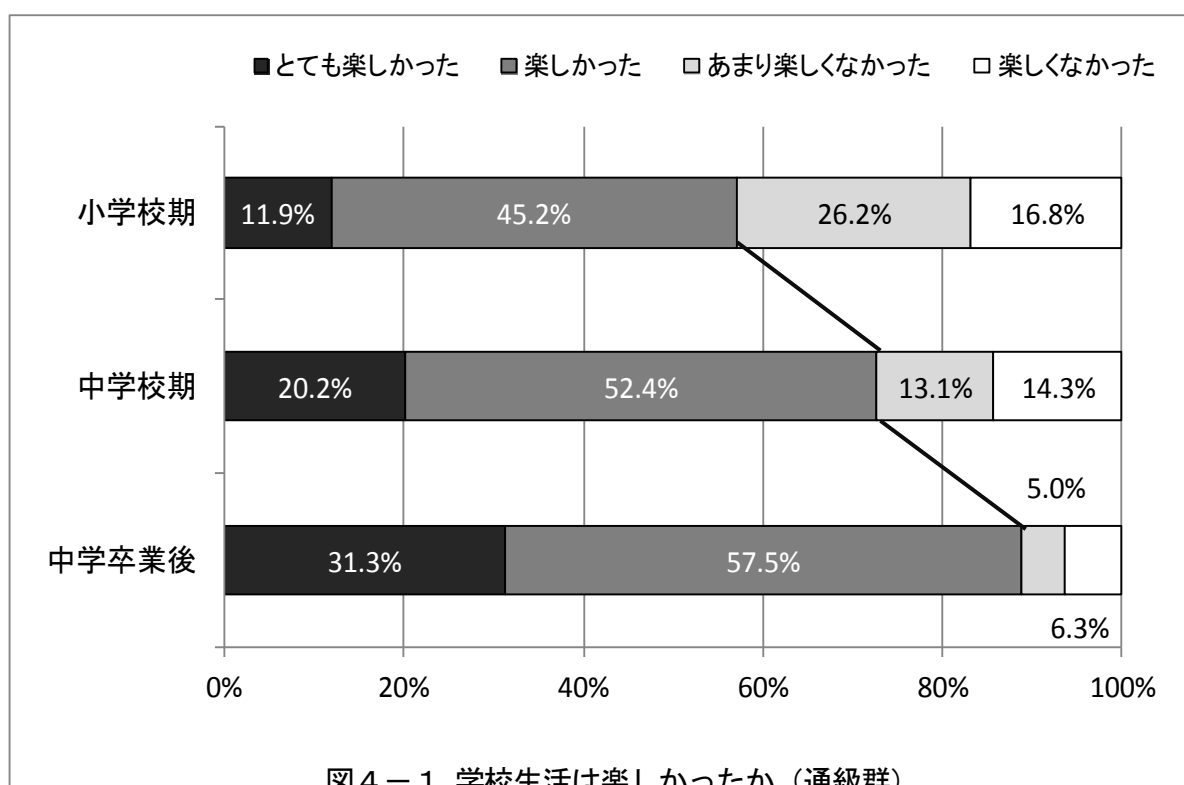
(1) 学校生活が楽しかったか、印象に残っていることについての回答の結果について

アンケートでは、小学校、中学校、中学校卒業以降のそれぞれの学校生活が楽しかったかについて、

『とても楽しかった』『楽しかった』『あまり楽しくなかった』『楽しくなかった』の4択で回答を求めた。また学校生活で『印象に残ったこと』について、記述式で回答を求めた(図4-1、4-2)。

小学校生活を『とても楽しかった』『楽しかった』と肯定的に回答した割合を合わせると、通級群は57.1%、一般群は92.2%であった。中学校生活についても同様に肯定的に捉えた割合は、通級群が72.6%、一般群が89.4%であった。中学校卒業以降の学校生活についても同様に肯定的に捉えた割合は、通級群が88.8%、一般群が93.5%であった。

中学校卒業以降の学校生活における『とても楽しかった』『楽しかった』という肯定的な回答の割合で見ると、通級群と一般群の比較において大きな差はみられない。しかし、小学校生活、中学校生活、中学校卒業以降の学校生活における『とても楽しかった』『楽しかった』の肯定的な回答の割合の変化について比較すると、一般群ではそれぞれ、92.2%、89.4%、93.5%と各年齢期での大きな差や変化がみられないのに対して、通級群ではそれぞれ57.1%、72.6%、88.8%と年齢期が進むにつれて、その割合が増えており、通級群の顕著な特徴といえる。



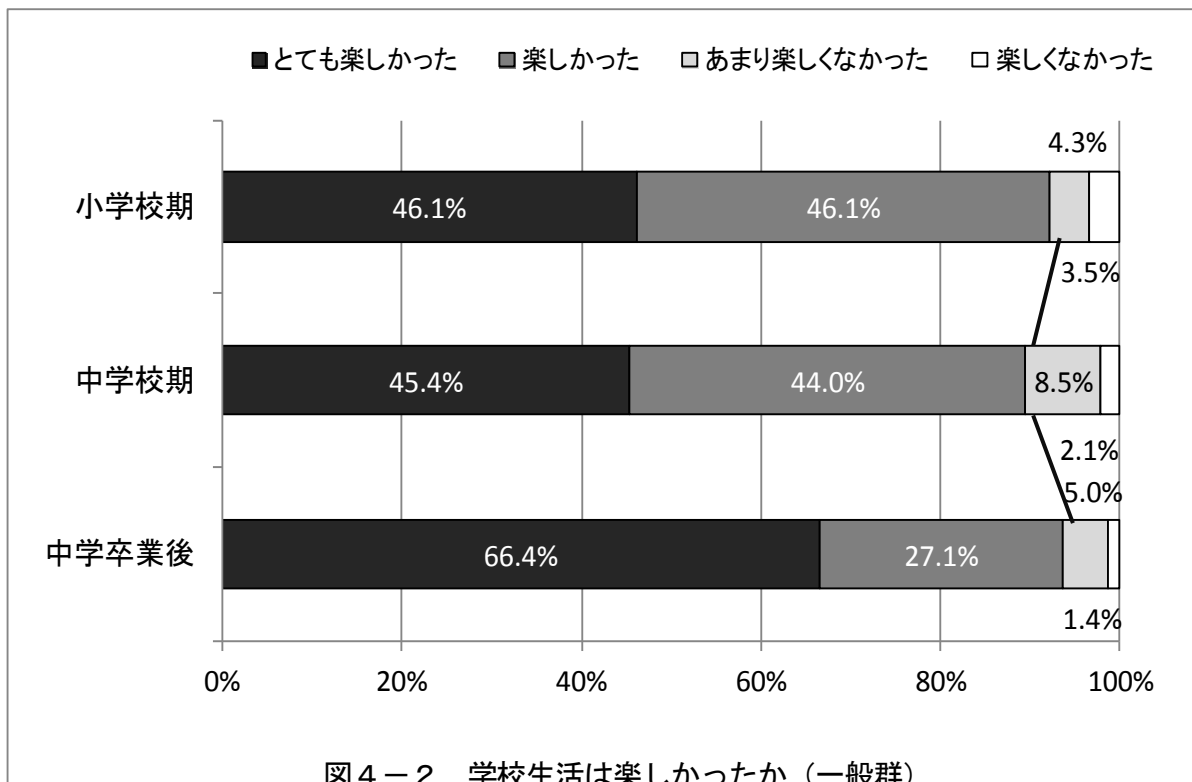


図4-2 学校生活は楽しかったか（一般群）

通級群が、一般群に比して小中学校生活を『あまり楽しなかった』『楽しなかった』と否定的に回答した割合が高かった要因について、インタビュー調査により具体的に聞き取ったこと、またアンケート調査の『学校生活で印象に残っていること』への回答から検討する。

インタビューにおいては、小学校では「小学校生活があまり楽しなかった、または楽しなかったのは何故か。」を聞き取ると、次のようなことばが聞かれた。

- 「小学生の頃は、周りの理解が無かったから、一人でいるほうが楽、マシと思っていた。」
- 「小学校の時には教室が嫌だった。人が多いのが苦手な、だから動き回っていたというのもある。極端に防御していたと思う。」
- 「小学校の頃はケンカも多く、友だちもいなかったのが楽しなかった。」
- 「小学校の時のことは話したくない。」
- 「小学校の頃は、感情をコントロールできなくてケンカとかになったことがあったから。」
- 「特定の人からいじめられた。何をされたのかは覚えていないけど。」
- 「ケンカで転校した。ケンカのことは思い出したくない。」
- 「6年の時、学校に行かなくなった。卒業式も出ていない。」

また、中学校についても同様に質問をすると、次のようなことば聞かれた。

- 「中学校は1年くらいいじめにあった。いじめられた相手より学校に恨みがある。」
- 「いじめにあって、罵声を浴びせられた。」
- 「上級生とか、いろんな人とケンカした。」
- 「中2のときに大暴れ、そこからケンカをしても無駄なことが多いと学んだ。」
- 「この時期がいじめられるなど友達らしい友達ができず、一番辛かった。」
- 「中学校の時は、いじめを受けていて、行きたくないと思ったこともあったけど、休まずに行け

ました。」

○「いじめにあったこととうつ病の発症」

また、アンケート調査の『小学校生活で印象に残っていること』においても、通級群では『友達とケンカした。』『周りからの嫌がらせが多かった。』『仲が良いと思っていた子に、ひどく傷つくことを言われ、しばらく人間不信になった。』などという否定的な回答が多くみられた。一般群では『毎日のように放課後遊んだこと』『運動会や修学旅行』など、肯定的なエピソードや学校行事についての回答が散見される。両群を比較すると、通級群は辛い思いをした具体的な経験の想起による回答や『あまり思い出したくない』という回答などから、辛く否定的な過去と捉えるケースが一般群より多いと考えられる。

通級群は、小学校段階での集団生活において、集団適応や対人コミュニケーション面での課題を抱え、改善途上にある場合が多いことが考えられる。そのため喧嘩やいじめなどにより躓きが生じやすく、『小学校生活は、楽しかったか』の設問に対して、一般群と比較すると否定的な回答をする割合が多かったと思われる。また一般群に比べて、小学校生活の具体的なエピソードや理由を回答に挙げている部分は、通級群の特徴ともいえる。負の経験として捉えている事柄が当時常態化していたわけでもなくいくつかのネガティブな思い出や記憶が強く印象に残ったり、被害的な捉え方をしていたりすることも推測される。一般群では、『中学校生活で、印象に残っていること』の設問に、「部活で毎日練習して、関東大会に出場したこと」「部活の後で、皆で仲良く話したこと」「合唱コンクール」と回答し、部活動や学校行事についての肯定的な記入が多い。両群を比較すると、通級群は小学校生活と同様に、『いじめ』などの辛い経験により人間関係で悩んだ時期と捉え、否定的な思いをもつ割合が多いと考えられる。

通級群において、年齢が進むにつれて『学校生活が楽しかった』という回答の割合が増える要因についても、同様にインタビュー調査により具体的に聞き取ったこと、及びアンケート調査『学校生活で印象に残っていること』の回答から検討する。

インタビューにおける小学校、中学校、中学校以降の学校生活の違いについての聞き取りでは、次のような言葉が聞かれた。

○「高校ではいじめは無かった。友だちもできたし、小学校や中学校とは、天と地くらい違う。」

○「高校のときは、友だちができた。普通に緩い感じで付き合えた。」

○「高2から生徒会に入って楽しかった。」「高校の校外研修が楽しかった。」

このようなことばからも、小学校、中学校と比べて中学校以降の学校生活での充実ぶりがうかがえる。また、アンケート調査の『中学校以降の学校生活で印象に残っていること』の設問には、「小・中学校の時は変なあだ名をつけられたり、いじめられたりしていたのが嫌だったけど、高校に入ったら可愛いニックネームをつけてもらい、友だちから心配されたり優しく声をかえられたりした。」「高校時代に友達ができた」「高校の3年間は平和だった」と、肯定的な回答が多かった。

これらのことから、通級群の集団適応度が高まる時期として、『高校期での安定』は大きな特徴といえる。その要因として考えられるのは、インタビューなどの具体的なエピソードからは、この時期になり安心できる友好的な『友だち関係』の充実ぶりがうかがえる。また、安定した学校生活を支える背景として『進路選択』の重要性も挙げられる。義務教育終了後、進路の選択肢が広がる中で、本人が納得した上で、自分の能力や特性、希望に合った学校選択ができることも、充実した高校生活に繋がる要因と考える。

(2) 部活の加入率や所属傾向について

部活に所属については、通級群は中学校で61.2%、高校で65.9%が何らかの部活に所属していたが、中高を通して全くの未所属が20.0%であった。一般群は中学校で90.1%、高校で90.0%が何らかの部

活に所属しており、中高を通して全くの未所属は 4.2%であった。部活の加入率を比較すると、中学校では通級群と一般群とで 28.8%、高校では 24.1%の差がある。通級群は一般群より『部活動』の加入率が低く、印象に残っているエピソードとしての回答も少なかった。またインタビューでも、部活についての質問に対して「部活に入れなかった理由に、先輩とのコミュニケーションがうまくいかなかったことがある。」「部活は、私は弱小部にしか入ってなかった。部活では緩いところは交友関係を広げて、きついところは上下関係を学ぶ場なんじゃないかなと思います。」という回答があった。一般群が、部活動におけるエピソードを回答している割合が多いことから、学校生活における部活動への加入は集団への帰属意識やそれぞれの充足感を高めたりすることに重要な要素となる可能性がある。そうした観点からは、部活動に限ったことではないが、満足感や達成感、また帰属意識に結びつくための学校生活における居場所づくりや心地よい人間関係づくりへの支援も必要と思われる。

5 通級指導教室について

(1) 通級指導教室で覚えていること

『ゲーム』や『運動』、『調理実習』などの指導中に経験した活動内容や『校外学習』や『宿泊学習』などの行事に関しての記述が多くあった。一方で、『現在、仲良くしている親友に出会えたこと』『通級での集団活動が楽しくて、友達ができた』など一緒に学習した『友だち』についての記述や、『先生の授業が楽しかった』『先生とよくケンカした』など『通級の先生』についての記述も多くあった。また、『先生方に迷惑をかけた』『私達が落ち着きなかったり、指示どおりに作業するのが困難だったり、先生方は手を焼かれたと思う』など当時の『自分の言動』について記述した人もいた。

(2) 通級指導教室を利用したことについて

『通級指導教室に通ったことは、あなたにとってよかったですか』との設問に、よかったです『思う』と答えた人の割合は全体の 67.1%で、『思わない』と答えた人は 7.0%、『わからない』と答えた人は 25.9%であった。

(3) 学んだことで役立っていること

この設問には、48名からの記述があった。その内容を分類した結果、3名以上の回答があったものを表 5-1 に示した。内容として、一番多かったのは会話や自己主張など『コミュニケーション』に関すること (12名) であった。次いで、友達との付き合い方、人との接し方など『対人スキル』に関すること (7名)、思いやり、人を認めるなどの『対人意識』に関すること (5名) であった。その他、『具体的な活動スキル』、『気持ちのコントロール』『行動のコントロール』『友達との交流』となっていた。

通級で学んだことで役立っていることの項目	回答数
コミュニケーション力 (傾聴、会話、話し合い、自己主張、援助要求、断り方)	12
対人スキル (仲良くする、友達との付き合い方、人との接し方)	7
対人意識 (気配り、思いやり、気遣い、人を認める)	5
具体的な活動スキル (切符の買い方、計画を立てる、楽器の演奏、しりとり)	5
気持ちのコントロール (怒らなくなった、切り替え)	4
行動のコントロール (落ち着き、思ったことをすぐに口にしない)	3
友達との交流	3

表 5-1 通級で学んだことで役立っていること

6 現在の生活について

(1) 進路決定の際に参考にしたこと

『進路先の情報』を参考にした割合は、高校期（56.4%）、高校期以降（56.9%）ともに半数を超えていた。しかし、高校期と高校期以降を比較した際の特徴としては、高校期は『自分の学業成績』を参考にした割合が43.6%であるのに、高校期以降では、『自分の学業成績』を参考にした割合が17.6%に減っている。また、『相談者からの助言』が、40.0%から60.8%と大きく増加する。この結果より、進路の幅が大きく広がる高校期以降の進路選択においては、『相談者からの助言』の必要性が増してくることが考えられる。

実際に進路選択の決め手となった事柄についてインタビューで聞くことができた内容としては、「頭の良い人がいればいじめられないと思った」「大学は通える範囲で選んだ。勉強しか取り柄がないから偏差値の低いところには行きたくない。」など学力から進路を選択した人がいる一方で、将来の就職のしやすさや就きたい職種から選択した人もいた。先の可能性を見通した選択をするというよりも、現在自分が置かれている状況から選択する者が多く、『現実的』『直観的』な選択をする傾向があることが特徴としてうかがえた。

(2) 生活の満足度

どの項目についても、『満足』『やや満足』（以下、満足群）の方が『少し不満』『不満』（以下、不満群）よりも高い割合を占めていた。その中でも『友人関係』『家族関係』の2項目については、満足群が80%を超えていた。また、『友人関係』『学校・職場の人間関係』『学業・仕事の内容』『学業成績・給料』『生活全般』の5つについては高校期とそれ以降に関して、大きな差はみられなかった。一方、『家族関係』については『高校期』では満足群が75.0%の一方で、『高校期以降』は満足群が97.9%の割合を占めていた。どの項目についても、満足群が65%を超えており、概ね日常生活に対して満足しているのではないかと考えられる。

『(1) 趣味・余暇の過ごし方 ③趣味・余暇を共有する人』の有無についての設問に対しては、『友人関係』の項目の『不満群』の66.7%が、『いない』と回答している。このことから、趣味を共有する人の存在や余暇を共に過ごす人の存在など、活動を共にする人の存在が友人関係の満足度に影響していると考えられる。

	友人関係	家族関係	学校・職場	学業・仕事	成績・給料	生活全般
通級群	81.3%	87.2%	73.8%	79.8%	65.5%	78.8%
一般群	93.6%	85.1%	85.8%	72.9%	71.6%	86.5%

表6-1 現在の生活の満足度（満足群）

また、このことに関してインタビューの回答の中で特徴的だった内容について挙げる。

学校内での人間関係について、『友だち』『何ともない』『近寄りたくない』と3つに分類して考えている」とする人がいた。また、『20歳を超えたから結婚』ということ意識するが、まだその気にならない」という人もいた。このように、ある事柄に明確な基準を設定して、それらを意識しながら生活しているという話があった。

次に、『金銭の管理』に関することとして、社会人においては、「実家暮らしで、家計に一定額のお金を入れている」「給料のうち毎月一定額を貯金している」「全部使ってしまう心配があるために一旦給料を全額母親に預けて管理してもらい、必要な時にもらっている」などの話を聞くことができた。

7 ストレスの対処について

(1) 『ストレス』と感ずることについて

20 項目 (a~t) の場面等について、ストレスと感ずるか否かを『はい』『いいえ』の二択で回答を求めた。『ストレスと感ずる』割合が過半数を超えたものは、通級群では 20 項目中 7 項目、一般群では 11 項目であった。

その項目については、通級群での割合の高い順に、次のような結果が得られた。

- c. 『自分の思いや考えを周りに理解されないこと』 (72.3%)
- f. 『約束やルールが守られていないこと』 (69.9%)
- i. 『やりたいことがすぐにできない時』 (66.3%)
- t. 『自然災害、社会現象に関すること』 (59.0%)
- m. 『計画を立てること、スケジュール通りに物事を進めること』 (57.8%)
- g. 『環境の変化や予定変更』 (56.6%)
- h. 『やっていることを途中でやめなければいけない時』 (55.4%)
一般群では同じく、次のような結果が得られた。
- i. 『やりたいことがすぐにできない時』 (78.0%)
- f. 『約束やルールが守られていないこと』 (73.8%)
- c. 『自分の思いや考えを周りに理解されないこと』 (69.5%)
- g. 『環境の変化や予定変更』 (67.4%)
- h. 『やっていることを途中でやめなければいけない時』 (63.1%)
- p. 『生活リズムが乱れること』 (58.2%)
- s. 『金銭に関すること』 (58.2%)
- t. 『自然災害、社会現象に関すること』 (56.7%)
- m. 『計画を立てること、スケジュール通りに物事を進めること』 (55.3%)
- j. 『私語や勉強で集中しなければならない時』 (54.6%)
- n. 『他者から期待されること』 (50.4%)

通級群と一般群とで順位は異なるものの、上位の 3 項目はともに c.f.i. であった。その割合から考えても、通級群と一般群とで大きな差異があるとは考えられないが、この中で i. 『やりたいことがすぐにできない時』については、通級群の方が一般群に比べて 10%以上ストレスと感ずる割合が低かった。また通級群の過半数を超える残りの 4 項目 (t.m.g.h.) についても、一般群も同様に過半数を超えており、通級群の方がよりストレスを感ずやすいという傾向が顕著にみられる項目はなかった。逆に、この 4 項目の中で g. 『環境の変化や予定変更』については、通級群の方が一般群に比べて 10%以上ストレスと感ずる割合が低かった。

一般群と通級群とで差の大きいものに着目してみる。一般群においては過半数を超えているが、通級群では過半数を超えない項目は p.s.j. の 3 項目であった。この中で特に p. 『生活リズムが乱れること』については、通級群の方が一般群に比べて 20%近くストレスと感ずる割合が低かった。通級群では『時間等への厳密さ』といった傾向から、自身の生活リズムやペースをもって生活しているために生活の乱れが生じにくいことや、逆に生活のリズムや基本的な生活習慣にあまり頓着しない傾向があることなどが要因として考えられる。インタビューからも「自分の趣味に没頭していて時間が乱れたことはあるが、親に言われてからは時間を決めている」といった回答があった。

さらに、両群ともにストレスと感じる割合が低い a.『人と会話すること』（通級群 30.1% 一般群 14.9%）と q.『他者からアドバイスを受けた時』（通級群 32.5% 一般群 13.5%）の 2 つの項目において、通級群は一般群に比べて 2 倍以上が『ストレスとを感じる』との回答を示した。また、r.『自分から援助を求めなければならない時』については通級群と一般群とで大きな差異はないが、インタビューの中で「援助を求めるのはすごいストレス」「援助を求めるよりは 1 人でやってしまいたい」「困っている様子を見せているのだから、援助を求めなくても助けてほしい」「（援助を求める方がよいことは）理論的にはわかっているけれども実行できるかはわからない」といった『援助を求めること』への抵抗感を示す具体的な回答が複数みられた。

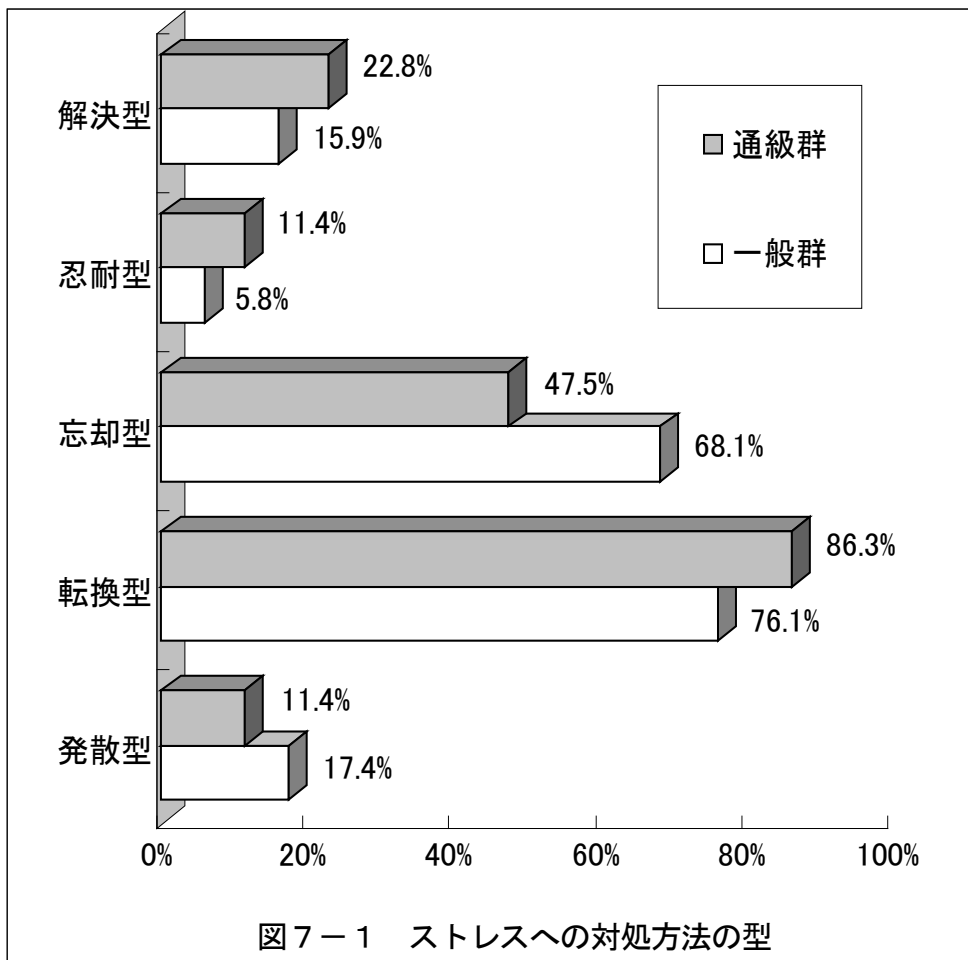
一般群では項目 q.『他者からアドバイスを受けた時』（13.5%）と r.『自分から援助を求めなければならない時』（37.6%）と一件関連しそうな項目に大きな差がみられたが、通級群では q.（32.5%）と r.（37.3%）と両項目の差はあまりみられなかった。r.『自分から援助を求めなければならない時』においては通級群と一般群に差がみられないが、q.『他者からアドバイスを受けた時』においては差がみられ、通級群では一般群よりも他者からアドバイスを受けることへのストレスが高いことがうかがえる。インタビューの中でも、「助言は正論を言われて、自分の間違いがわかる。でも、“あなたのために”と言われても…」と理解はできても、受け入れることが難しい心情を言葉にした人もいた。

（2）『ストレス』を感じた時に落ち着くための対処方法について

ストレスへの対処については、自由記述による回答を求めた（図 7-1）。

通級群では、ストレスの対処で回答している方法と『（1）趣味・余暇の過ごし方』が同じような内容となっている人が通級群は 81.3%であり、一般群では 68.1%であった。通級群の方の重なりが多いが、両群とも趣味などでストレス対処する人たちが多かった。両群の特徴的な違いは、『寝る』との回答が、通級群では 30.0%であったのに対して、一般群では 64.5%と通級群の 2 倍以上であり、一般群の方が寝ることによりストレスを解消する傾向が高いことであった。

さらに、対処方法として挙げられた具体的な記述を、相談するなどの『解決型』、我慢するなどの『忍耐型』、寝るなどの『忘却型』、趣味の活動を行うなどの『転換型』、叫ぶ、泣くなどの『発散型』の 5 つに分類して、その割合を算出した。どちらの群とも先述したように趣味等の余暇活動をストレス対処として挙げる傾向が高いことから『転換型』が最も多かった（通級群 86.3%、一般群 76.1%）。両群で大きな差があったのは『忘却型』であり、一般群が 68.1%であったのに対して、通級群では 47.5%と 20%以上の差がみられた。また、『忍耐型』は全体の割合としては低いですが、通級群（11.3%）が一般群（5.8%）の約 2 倍の割合を示した。通級群は一般群に比べて、忘れることによる解決が難しいこと、また、『我慢』で対応する傾向が高いことがうかがえる。



8 相談者、理解者について

(1) 相談する相手について

困った時に相談する相手がいるか否かという設問には、通級群は88.1%が『いる』との回答であった。一般群は95.0%が『いる』との回答であり、両群に大きな差はみられなかった。次に、相談する相手が『いる』と回答した者に、その相談者について尋ねた。

通級群では、『母親』を相談相手として挙げている割合が最も高く(82.4%)、次いで『友人』(56.8%)、『父親』(54.1%)、『先生』(41.9%)、『先輩』(24.3%)、『兄弟』(23.0%)であった。一般群では、『友人』を相談相手として挙げている割合が最も高く(90.3%)、次いで『母親』(70.9%)、『父親』(43.3%)、『兄弟』(32.8%)、『先輩』(32.1%)、『先生』(24.6%)、『サークルの仲間』(23.1%)であった。上位3つについては通級群、一般群ともに『母親』、『父親』、『友人』と共通であり、『母親』と『父親』については通級群の方が一般群よりも10%以上高い割合を示している。また、特に『友人』を相談相手とする回答は通級群でも56.3%と過半数の回答はあるものの、一般群90.3%に比べると通級群は顕著に低い結果となった。逆に、通級群の方が高い結果となった項目は、『先生』(通級群41.9% 一般群24.6%)、『カウンセラー』(通級群20.3% 一般群1.5%)、主治医(通級群16.2% 一般群0.7%)であった。

通級群の方が一般群と比べて両親を相談相手とする傾向がやや高いことに加えて、特に家族以外の相談相手として、一般群では『友人』『サークルの仲間』など同年齢や同じ立場の相手を選択できる傾向が高く、通級群は『先生』『カウンセラー』『主治医』など比較的年齢や立場が上であり専門的な立場にあ

る人を選択する傾向が高いことを示している。同年齢もしくは年齢の近い仲間との関係性について、通級群と一般群とでは明らかに違いがみられる。

(2) 相談内容について

現在、相談相手がいるか否かの回答にかかわらず、『相談したことがある内容』についての回答を求めた。通級群は『進路・職業選択』(61.9%)が最も多かった。次いで、『友人関係』(54.8%)、『学校生活』(48.8%)、『将来』(47.6%)、『自分の性格や言動』(46.4%)であった。一般群(N=141)では、『進路・職業選択』(70.9%)で最も多く、次いで『友人関係』(60.3%)、『将来』(57.4%)、『学校生活』(48.9%)、『自分の性格や言動』(42.6%)であった。両群ともに上位を占める内容に大きな差はみられなかった。

一方、回答に占める割合は低いものの、⑨『健康』については通級群が31.0%、一般群が9.2%であった。⑩『ストレス対処』については通級群が25.0%、一般群が10.6%と通級群の方が顕著に高かった。このことは、一般群に比べて通級群の方が心身の健康に対する自己解決が難しい傾向を示唆していると考えられる。『恋愛・異性関係』については、通級群は17.9%に対して一般群は2倍以上の36.9%と結果であった。

9 自分について

(1) 最も成長したと思うこと(自由記述)

通級群90.8%、一般群96.9%が自分の成長を認めた記述がみられた。

自由記述について、我慢できるようになった、気持ちが抑えられるようになった等の『感情のコントロールに関すること』、『性格に関すること』、他人への気遣いができるようになった、人との関わり方等、コミュニケーションに関することも含めた『対人関係に関すること』、『考え方・態度に関すること』、『具体例など』、『分からない・ない等』の項目に分類した。

通級群では、『感情のコントロールに関すること』の記述が38.2%と多く、次いで、『対人関係に関すること』の記述が23.7%と多い。毎日きちんと仕事に取り組める、新しいこともできるようになった等『考え方・態度に関すること』は18.4%、勉強、演劇、身長、免許取得等、『具体例』的な内容は14.5%、『分からない・ない等』が9.2%であった。一般群の回答では、『対人関係に関すること』が最も多く33.3%、『感情のコントロールに関すること』の17.8%を上回っている。『具体例』は22.5%、『考え方・態度に関すること』は17.8%、『分からない・ない等』が3.9%であった。

通級群が一般群と同様の割合で自分の成長した部分を認めることができていることが分かった。注目すべき点は、『感情のコントロールに関すること』と『対人関係に関すること』の回答率が、通級群と一般群とでは逆転をしている点、また『感情のコントロールに関すること』の割合が一般群の2倍以上となっている点である。これは、一般群に比べて通級群が、幼少から感情のコントロールに関する課題が大きく、その指導・支援を受ける機会が多かったことから着目しやすいこと、「爆発しなくなった」「暴言を吐かなくなった」「我慢が出来るようになった」といったインタビューの回答からも、自身の変化・成長として捉えやすいことも考えられる。【(9) ④言われてうれしい言葉】の回答とも関連するが、他者が介在する場面では、他者からの具体的な評価がないと自身の振り返りが難しく、『対人関係に関すること』においては自分の成長として認めにくいのではないかと考えられる。

(2) 今の自分が好きか

『とても好き』『好き』『あまり好きではない』『好きではない』の4択で回答を求めた。通級群の59.5%

が『自分をとても好き』『好き』と答えており、肯定的に自分をみているケースが多い。一般群では、『自分をとても好き』『好き』を合わせると58.2%であり、通級群と一般群に大きな違いは認められない。

インタビューでは、自分を好きになるためには「何か一ついいところがあるといい。人から認められるもの、アピールできるもの（がほしい）」という回答もあり、他者からの評価が自分の価値観に大きな影響を与えている様子が見える。

（3）周りから頼りにされた経験、役に立った実感

『ある』『分からない』『ない』の3択で回答を求めた。

通級群の54.1%が『ある』と回答している。『ない』という回答は4.7%であり、『分からない』との回答は41.2%になる。一般群では71.6%が『ある』、25.5%が『分からない』との回答であり、差が認められる。一方、『ない』2.8%についてはほぼ変わらない。『ある』と回答したもののうち、【(9) ②自分が好きか】の設問で『とても好き』『好き』と回答した割合は、通級群で76.1%であり、一般群では67.3%であった。通級群の方が役に立った経験が自己有用感に結びついている割合が約10%高い。

インタビューでは、「頼りにされた経験は、高校の生徒会で。」「頼りにされた経験は、はっきりある。中学では鉄道研究会の部長、高校では副部長をした。」といった回答があり、部長など役職につくことが『役に立つ』という実感と結びついていることがうかがえる。通級群は、役割を担ったり、「役に立っている」など他者から具体的な評価を受けたりすることにより自己有用感が得られやすいと思われる。

（4）言われて嬉しい言葉（自由記述）

通級群では、『ありがとう』が36.5%と最も多い。次に多いのが『頑張っているね』『いい人だね』等の他者から認められる言葉(31.1%)、好き(2.7%)、その他『一緒に帰ろう』『友達と言ってもらえる』等、具体的な内容も散見される。『分からない』『ない』との回答は、16.2%であった。インタビューでは、「『気にするな』と言われるとほっとする。」「『あなたはいい人だ』と言われたら嬉しいが、言われたことがない。」といった回答があった。一般群は、最も多いのが『ありがとう』であり53.5%である。次いで『頑張っているね』『いい人だね』等の他者から認められる言葉(38.6%)であった。通級群との違いは、一般群は『分からない』『ない』との回答が1.6%と少ない点、また『好き』との回答が10.2%と多くなる点である。

『ありがとう』『頑張っているね』等、他者からの肯定的に認められる言葉が上位を占める点では、通級群、一般群ともに共通している。通級群が『分からない』『ない』という回答が多い点については、実際に言われる機会が少ないだけでなく、曖昧な表現の解釈が難しかったり、状況理解の弱さがあつたりすることが影響しているとも考えられる。

（5）許せない言葉や事柄（自由記述）

通級群では、『死ぬ』『ばか』等のネガティブな言葉が一番多く(33.8%)、次に『ない』(13.5%)であり、『無視』との回答もあった。ネガティブな言葉には、『ごみ』『邪魔』『デブ』『豚』『どっか行け』『役立たず』『馬鹿だから仕方ない』『この世から消えろ』等が挙げられていた。その他、『独り言を止めさせられる』という回答もあった。また、冗談、お世辞などを許せない言葉として受けとめている回答もあった。一般群でも『死ぬ』が最も多い等、人を傷つける言葉を許せないとする回答が46.6%で多い。『ない』との回答は5.9%である。具体的な記述では、これまで自分が言われてきた言葉が多く挙がってきているのではないと思われる。

(6) 尊敬する人

尊敬する人の有無について、二択で回答を求めた。さらに、『尊敬する人がいる』と回答した人については、尊敬する人について具体的な記述（複数回答可）を求めた。具体的な記述については、『家族』『友人・先輩』『著名人』『先生』『その他』に分類をした。

通級群の66.7%が尊敬する人がいると回答している。具体的な記述では、『家族』（32.7%）、『友達・先輩』（30.8%）、『著名人』（28.8%）、『先生』（26.9%）『その他』（5.8%）であった。『その他』以外の4つの項目には、大きな差がみられない。一般群では、81.2%が尊敬する人がいると回答している。具体的な記述では、『家族』（47.2%）『友達・先輩』（32.4%）『先生』（25.9%）『著名人』（15.7%）『その他』（3.7%）の順であった。

通級群・一般群共に『家族』が最も多く挙げられているが、一般群においてはその割合が他と比較して高い。また、通級群は一般群に比べて『著名人』の割合が高い。インタビューでは、「尊敬する人といえば父とかになると思うんですが、僕は尊敬できません。友達は、歌がうまい、ゲームがうまいなどちょっとしたことで尊敬できます。」「プロ棋士〇〇さん。頭がいい、とにかく強い、集中力がすごいところ。」「手本にしたくなるほど、人徳のある人に出会ったことがない。」「日本でひとりだけのプロのゲームの〇〇さん。」などの回答があった。通級群にとって『尊敬する』ということの要因に、自分の興味関心のあることに関する具体的な活動や業績がみえる人を選択しやすい傾向があるのではないかと思われる。そのため、一般群に比べて『著名人』などを選択しやすく、生活を共にしている『家族』の割合が少ないのではないかと考えられる。

(7) 大切にしていることやもの（自由記述）

自由記述の内容を、楽器・車など『具体的なものに関すること』、家族、友達といった『人に関すること』、『趣味に関すること』、『信条・信念に関すること』、『健康に関すること』、『その他』『分からない・ない』に分類した。

通級群では、『人に関すること』の回答が32.8%と最も多く、次に『具体的なものに関すること』（28.1%）、『信条・信念に関すること』（21.9%）、『趣味に関すること』（9.4%）であった。残りの項目は、それぞれ8%に満たない。一般群は、『信条・信念に関すること』（52.8%）、『人に関すること』（48.8%）、『具体的なものに関すること』（15.4%）、『趣味に関すること』（3.3%）であり、残りの項目への回答はなかった。一般群の回答と比べると、通級群においては、『信条・信念に関すること』といった抽象的な事柄に言及する回答が少なかった。

10 将来の夢、未来の姿について

将来の夢の有無について、二択で回答を求めた。さらに、『ある』と回答した者については、夢の内容について自由記述で回答を求めた。

通級群の67.9%が将来の夢があると回答している。自由記述では、『バス運転手』『ウエイトレス』『大工』『保育士』『マスコミ関係』『パン屋』『作曲家』『小説家』等、就きたい職種など、働くことを挙げた人が64.2%であった。『結婚して、家族を築く。（または幸せにする。）』『就職して安定した生活を送りたい』『一人で生活できるようになりたい』といった生活設計を挙げた回答もみられた。通級群の多くが、将来の職業自立に対する夢をもっていることが分かった。

インタビューでは、「普通の人になること」という回答に「普通の人とは、どういうことか」と尋ねたところ、「日本人として空気が読めて、嫌なことも“はい”と言って、授業も受けて、周りから外れない

…かな。」という回答もあった。

V 総合考察

小学校情緒通級を利用した 16 歳から 26 歳の人たちへ、現在の生活の様子やその満足度などについてのアンケート調査を行い、彼らが社会生活を維持するための個々の手立てや対処の在り方、また彼ら自身の自己の捉えや将来への見通しなどについて、多くの示唆を得ることができた。

1. 通級利用者の現在の状況

今回の調査からは、彼らがこれまでに学んできた様々な社会的スキルを場に即して活用することで社会生活への適応度を高めていることがうかがえた。それは、学校生活の振り返りの中で年齢が進むにつれ「学校生活が楽しかった」という肯定的な回答が増えていったこと、現在の生活において趣味をもち余暇を楽しむことができていること、自分を取り巻く人間関係（友人、家族、学校・職場など）や学業・仕事、その成果など、現在の生活における満足度、「将来の夢を持っている」との回答がともに約 7 割を示したことになどに表れている。

一般の大学生との比較により通級利用者の特徴的な面もみられた。例えば、趣味や余暇の過ごし方については、大学生に比べ通級利用者は、自宅で、そして一人で活動する内容のものが多く。しかし一方で、友人関係の満足度については、趣味を共有する人の存在や余暇を共に過ごす人の存在など、活動を共にする人の存在が大きく影響していることも示唆された。

2. 対人関係やコミュニケーションに関する課題と転機となる高校期

全般的な適応能力は高まっていると考えられるものの、大学生との比較から通級利用者の対人関係やコミュニケーションに関する課題があらためて明らかになった。例えば、苦手なことについての質問に対して、一般の大学生は、対人関係・社会性に関しては苦手であるという回答が比較的多かったが、コミュニケーションを苦手とする回答は少なかった。それに対して通級利用者では、対人関係・社会性に関することと同様にコミュニケーションも苦手という回答が多く、『会話の入り方や話しかけ方などルールが分からない』『語彙力の不足』『相手の気持ちを汲み取ることが苦手』などのコミュニケーション能力の弱さが、対人関係の構築や維持に影響を与えていることが推察された。

「学校生活が楽しかったか」という質問の回答にも、その特徴が表れる。大学生が小学校、中学校、中学校卒業以降の学校生活において「とても楽しかった」「楽しかった」と回答した割合がいずれも約 90%で変化がみられないのに対し、通級利用者の場合は年齢が進むにつれて肯定的な回答の割合が増えていく。小学校では約 60%であったが、中学校卒業以降においては約 90%に達する。通級利用者にとって集団適応度が高まる時期が中学校卒業以降の高校期であるということが示されているといえる。この時期になり安心できる『友人関係』が充実し、また義務教育終了後、自分の能力や特性、希望に合った学校選択ができることも、充実した高校生活に繋がると考えられる。

このことは、インタビューからもうかがえた。これまでの学校生活を振り返ると、中学までは人間関係で苦しんでいたが、年齢が上がり高校以降は楽しく過ごせたというケースが多かった。彼らのことばの中に「小学生のころは全く気にしていなかったけれど、だんだん周りのことを考えるようになった」というものがあった。「いつ頃から、周りのことを考えられるようになったのか」という質問に対しては、ほとんどが「高校生くらいから」という回答であった。また、苦手なこと、得意なことも含めて自分の

変化や成長について「昔は～だった。今は、それほどでもない。」「～ができるようになった。」という言葉がどの人からも聞かれた。このように、加齢とともに自分自身や周囲との関係についての気づきがあり、自身の特徴や特性を踏まえた自分なりの対処方法が語られた。以上のことから、発達障害のある彼らにとって、高校期が大きな転機となっていることがうかがえた。

3. ストレスへの対処と相談

様々な経験や学習を通して社会的な適応度は高まっても、生活の中での具体的な躓きやストレスは、不安や不快感として残りやすい。自分の性格・特徴に関する質問では、『夢中になると切り替えが難しい』『初発や変更は落ち着かない』『些細なことにも不安・緊張を感じる』『約束やルールに厳密』という回答が多かった。これらは、変化や変更に対して臨機応変に対応することの苦手さとして、自分の特性を捉えていることがわかる。

『相手の気持ち、周りの空気を読めない方だ』『冗談や皮肉がわからない』は、社会的な暗黙の了解にかかわる部分であり、その部分での苦手さは社会生活における躓きやストレスに大きく影響することが考えられる。心情や雰囲気把握のしづらさは、現在も半数以上が難しさとして捉えていることから、彼らの社会的な適応の困難さとして長く影響することがうかがえ、周囲の理解や支援が重要なポイントになると考えられる。

こうしたストレスに対しては、趣味や余暇の活動によって対処しているという回答が多かったが、大学生に比べて通級利用者の方がその傾向は強かった。また、大学生は寝ることで対処する者が多いのに対し、通級利用者では寝ることで対処する回答は少ない。このことは、通級利用者は寝るなどの行為によって「忘れる」ことによる解決が難しく、「我慢する」ことで対処する傾向が強いことも示唆していると考えられる。そうした傾向からは、彼らが自分なりの対処方法を身につけたとしても、一般群と比べてストレスを感じやすかったり、それが大きな負荷として蓄積しやすかったりすることが懸念される。

困ったときに誰かに相談ができるということも、重要な社会的スキルである。対人関係やコミュニケーションに関する課題を抱える通級利用者にとって苦手なことであるが、アンケートでは約90%が「困ったときに相談できる相手がいる」という回答であった。通級利用者は、大学生に比べて両親を相談相手とする傾向がやや高かった。また、家族以外の相談相手として、大学生は『友人』『サークルの仲間』など同年齢や同じ立場の相手を多く挙げていたが、通級利用者では『先生』『カウンセラー』『主治医』など比較的年齢や立場が上で専門的な立場にある人が多く挙げられていた。ここでも同年齢もしくは年齢に近い仲間との関係性について、通級利用者と大学生では明らかに違いがみられた。

インタビューの中で「援助を求めるのはすごいストレス」「援助を求めるよりは1人でやってしまいたい」「困っている様子を見せているのだから、援助を求めなくても助けてほしい」「(援助を求める方がよいことは)理論的にはわかっているけれども実行できるかはわからない」といった『援助を求めること』への抵抗感を示す具体的な回答が複数みられたことも特徴的である。また、通級利用者は、他者からアドバイスを受けること自体もストレスになっていることがうかがえる。一般的には、他者に相談したり他者からアドバイスを受けることで、自分にかかる負荷やストレスを軽減あるいは解消できる可能性もあると考えられるが、通級群にとってはそれがストレスとなってしまうことを示唆しており、彼らへの援助の在り方には慎重を期する必要があると考えられる。

4. 自己有用感・自己肯定感の獲得

自分の良さや成長した面などに対する認識や実感についての回答に着目してみると、具体的に変化、

変容が見取れたことや手応えの実感が得られたことについては理解・把握しやすい傾向がうかがわれた。具体的には、技能的な上達や良好な友人関係、自分の課題として捉えていた言動の改善などについて言及がみられた。周囲からの評価という面からは直接的に褒められたこと、労われたこと、認められたこと、喜ばれたことなどが実感として受けとめやすい。曖昧な表現は理解しづらく、その時々文脈に沿って適切に状況把握することは難しいことなどが推察される。反面、他者からの否定的で不用意な言葉に必要以上に深く傷つくことも考えられる。前述の通り、本人にとって不快の感情が残りやすく、自信や意欲を損ねることが懸念されるため、彼らとかがかわる周囲は、そのことに十分に留意する必要がある。適切な自己理解を促し、自己有用感・自己肯定感が得られるように支援するためには、周囲からの的確、かつ客観的・具体的な評価と励ましが重要である。また、その際には他者の気持ちを率直に伝えていくことも必要であろう。

今回のアンケート調査やインタビュー調査での貴重な回答から、彼らが適切な自己認知・自己理解のもとに、今在る「自分」を肯定的に捉え、無理をして周りに合わせるという精神的な負荷や疎外感をもたずに、個々が所属する場での適応を図りながら能力を發揮し、日々過ごせるような環境設定や支援の在り方が大切であること示唆された。義務教育終了以降は、それまでに学んだ社会的スキルを活用し、様々な経験を積む中で、自分のよさや苦手さも含めた自他の違いを知り、安定した社会生活を過ごすことが求められる。彼ら自身が個々に困らないための方略を工夫・活用することにより、苦手さや日常生活上の困難さを軽減できる可能性があるという視点を持ち、指導・支援していくことも大切であると考ええる。

5. 自己理解を促す支援の在り方について

横浜市的情绪通級では、これまで小集団指導を中心に指導を行っている。この小集団を中心とした指導形態は、対人関係やコミュニケーションに課題を抱えている通級児にとって、「少ない人数の中で特定の人に対して意識を向けやすい」「構造化された環境の中で子ども同士のやり取りが設定できる」などの点で、有効な指導形態ではないかと考えられる。

杉村(1998)は、アイデンティティの形成について、「自己の視点に気づき、他者の視点を内在化すると同時に、そこで生じる両者の視点の食い違いを相互調整によって解決するプロセスであるということが出来る。」と述べている。さらに、「アイデンティティ形成の実際の作業である『探求』は、人生の重要な選択を決定するために、他者を考慮したり、利用したり、他者と交渉することにより問題解決していくことであると定義できる」と述べている。このことから、同年代の他者との関係性の中で活動を進めていくことが、自己理解を深めていくためにも必要であると考えられる。また、滝吉・田中(2011)は、広汎性発達障害者の「対人性タイプ」として、「他者から言われたことをそのまま受けとめる、規範的な価値判断から自己を捉える」タイプが多い傾向にあると述べており、学校や家庭で言われていることが自己理解に強く影響を与えることが想定される。そのためにも、家庭や学校など彼らを取り巻く人々が連携を図りながら、彼らの自己を捉える特性についての共通理解をもって、自己理解を促すことが必要であると考えられる。

横浜市的情绪通級では、前述の小集団指導の形態を中心に、ソーシャルスキル課題をはじめ具体的な活動を通して、自分の特性・特徴、考え方や行動の傾向等について知る、自他の良さについて理解し認め合うということを目指して指導を行っている。実際の指導では、場面状況に応じて求められるスキルを理解すること、学んだスキルを実行することに加えて、活動後には自他の言動を振り返る機会、その振

り返りからより望ましい言動について考えたり、相互の特性や良さを認め合ったりアドバイスし合ったりする機会を設けている。つまり、集団や社会に適応するための形式的なスキルの獲得に留まらず、そのスキルを社会的・対人的場面において、活用できるように指導している。特に近年は、他者とのかわりやコミュニケーションが必要な様々な活動場面を設定し、そこでの成功体験から自己有用感・自己肯定感を育むとともに、適切な自己理解を促すことを重視し指導を行っている。本研究において通級指導が自分にとって、「よかったと思う」と回答した人の割合が約 7 割であった。通級で学んだことで役立っていることについての内容としても、『コミュニケーション』『対人スキル』『対人意識』『具体的な活動スキル』『気持ちのコントロール』『行動のコントロール』などが挙げられていた。通級指導が役立ったと感じる人にとって、その内容は指導担当者が指導において意図した目標や内容と一致するものであったと言える。このことは、彼らにとって、通級指導が現在の生活においても良い影響を与え、自己の特性や特徴を理解しながら他者との関係を育む際に役立っていると思われる。「適切な自己理解」を育むためには、過去の経験を適切に振り返り、現在の自分に活かしていくことが必要と考えられる。

インタビューにおいて、「人の良い面に気づけるようになった」「人と会話する際に役立っていると思う」など、「現在の生活において役立っていること」についての内容があった。また、「先生と一対一で話をする中で日ごろのうっぶんを晴らすことができた」「通級を使っていなかったら、学校で授業を受けるができなかったかもしれない」「通級がなかったら、もっと人を避けたり、友だちもできなかったりしたかもしれない」など、通級の存在が「当時の本人の適応や安定に役立っていた」と振り返る回答もあった。一方で、「通級に通うことで『さぼりだ』と言われたことがあり、行きたくないと思った」「通級に行くことで、受けられなかった授業が気になった」など、当時の通級の存在が「悩みや不安の要因」になっていたという人もいた。このような通級を利用していた本人たちの言葉は、通級指導の役割について、彼らの「今（現在）」「将来（未来）」という時間的な側面と、特別な場で行う特別な指導の「メリット」「デメリット」という効果にかかわる側面の双方の視点をもちながら考えていく必要があることを示唆している。

～謝辞～

本研究では、横浜市立小学校の情緒障害通級指導教室で通級指導を利用したかつての教え子たち本人にアンケート調査及びインタビュー調査へのご協力をいただきました。そこで得られた彼らの回答やことばなどを通して、発達障害のある人々の青年期・成人期における自己理解の在り方について考察することにより、実に多くの貴重な示唆を得ることができました。特にインタビューでは、彼らが自分自身を振り返り、それを私たちに自分のことばで伝えることができたことに成長を感じました。私たちが想像していた以上に語ってくれた部分もあり、その中で私たちが気付かされたことも少なくありません。そのことにより、私たちもまた彼らを改めて理解できたように思います。学齢期の支援者の一人として、彼らの思いを汲み取り代弁することだけではなく、彼ら自身の思いを引き出し、彼ら自身が表現し伝えることができるように支援することも私たちの大きな役割の一つなのだ、改めて認識する機会ともなりました。また、青年期・成人期を生きる教え子たちの現在の生活の状況を把握し、成長や変容を多面的に知ることを通して、彼らの自己理解の在り方と社会生活への適応との関連を考察したことは、今後更に社会が彼らを適切に理解し、支援していく上での重要な手がかりを得ることができたという意味において、その意義は非常に大きいと考えられます。横浜市立小学校情緒障害通級指導教室追跡調査研究

会として、小学校期に必要な指導・支援について再考し、今後の小学校情緒障害通級指導教室が担う役割について検討する貴重な機会をいただけたことは非常に有意義であったと考えます。

本研究の意義を理解し、快く調査への協力をしていただいた多くの教え子の皆様、そして彼らを支え励まし続ける保護者の皆様には、心より感謝申し上げます。

また、比較検討のために調査にご協力くださいました大学及び学生の皆様にも、感謝申し上げます。なお、本研究には横浜市立小中学校の各情緒障害通級指導教室にもご協力をいただきました。

最後に、本研究を進めるにあたり、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の笹森洋樹先生にはご多用にもかかわらず、丁寧にご指導ご助言をいただき、心より感謝申し上げます。

〈引用・参考文献〉

- 1) 菊地哲平(2004)：自閉症における自己と他者、そして心，九州大学心理学研究，第5巻，39-52.
- 2) 岡潔・小野次朗(2010)：高機能広汎性発達障害児の自己評価と自己認識に関する研究，第8巻，39-48.
- 3) 杉村和美(1998)：青年期におけるアイデンティティの形成 関係性の観点からの捉え直し，発達心理学研究，9，45-55.
- 4) 滝吉美智香・田中真理(2011)：思春期・青年期の広汎性発達障害における自己理解，発達心理学研究，22(3)，215-227.
- 5) 国立特別支援教育総合研究所(2012)：発達障害と情緒障害の関連と教育的支援に関する研究—二次障害の予防的対応を考えるために—研究成果報告書
- 6) 滝吉美智香・田中真理(2009)：思春期・青年期における自己理解，東北大学大学院教育学研究科研究年報，57(2)，301-322.
- 7) 田辺正友・田村浩子・神野歩(2005)：高機能自閉症児の「障害の自己理解・受容」と教育・発達支援，奈良教育大学紀要，54(1)，103-111
- 8) 望月葉子(2002)：軽度発達障害者の「自己理解」の重要性，発達障害研究，24(3)，254-261
- 9) 樋口智慧(2006)：親からみた軽度発達障害児・者の障害理解と自己理解，大阪教育大学障害児教育研究紀要，29，109-118
- 10) 桑田左絵・神尾陽子(2004)：発達障害児をもつ親の障害受容過程についての文献研究，九州大学心理学研究，5，273-281
- 11) 山根隆宏(2009)：高機能広汎性発達障害児をもつ親の適応に関する文献的検討，神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，3(1)，29-38
- 12) 滝吉美智香・田中真理(2009)：ある青年期アスペルガー障害者における自己理解の変容，特殊教育研究，46(5)，279-290
- 13) 蔦森武夫(2012)：中学校から高等学校、その後の支援のつながりの実践，発達障害教育指導者研究協議会資料

青年期・成人期の自己理解に関するアンケート

- 1 目的 本調査は、青年期・成人期に達した通級指導教室利用者の義務教育終了以降の生活状況の経過等について、アンケートを実施することにより、その回答から、社会的自立に向けた自己理解の在り方について考察することを目的としています。
- 2 調査対象 小学校通級指導教室を利用した経験のある現在15歳～25歳の方
- 3 記入について
- ①表紙に性別と年齢をご記入ください。
 - ②回答の仕方には、当てはまるものに○を記入するものと、[]の中に記述していただくものがあります。
 - ③当てはまるものが無い場合には、「その他」にご記入ください。
 - ④全ての問いにご回答いただくのに、30分程度かかります。
- 4 提出期限、及び提出先
- 提出期限 平成24年7月31日（火）までに
- 提出先 横浜市立左近山第一小学校 通級指導教室

性別	男 ・ 女
年齢	歳

1 趣味・余暇の過ごし方について

(1) 現在、休日や自由な時間は何をして過ごしていますか。

()内の項目から当てはまる内容全てに○をつけてください。

①自宅で過ごす

- A 映像・音楽を楽しむ。
(テレビ、DVD、ゲーム、パソコン、音楽鑑賞、楽器演奏、その他_____)
- B ものづくり活動をする。
(絵を描く、小説を書く、プラモデル、鉄道模型、手芸、その他_____)
- C 本や漫画等を楽しむ。
(小説、雑誌、図鑑、地図、ガイドブック、その他_____)
- D グルメを楽しむ。
(料理、おやつ作り、お酒、お取り寄せ、その他_____)
- E コレクションを楽しむ。
(フィギュア、ミニカー、アニメ、アイドルもの、カード、その他_____)
- F その他
(寝る、ペット飼育、園芸、勉強、資格取得、その他_____)

②自宅以外で過ごす

- A 映像・音楽・美術を楽しむ。
(映画、コンサート・ライブ、演劇、楽器演奏、カラオケ、その他_____)
- B 地域のサークル・教室で活動をする。
(絵画、陶芸、料理、手芸、音楽、水泳、ダンス、将棋、その他_____)
- C 学校や職場の部活動・サークル活動をする。
(具体的な活動内容：_____)
- D 本や漫画等を楽しむ。
(図書館、漫画喫茶・インターネットカフェ、書店、その他_____)
- E グルメを楽しむ。
(外食、デパ地下、物産展、駅弁、その他_____)
- F スポーツを楽しむ。
(運動する → 具体的な内容：_____)
(観戦する → 具体的な内容：_____)
(その他 _____)
- G 文化芸術を楽しむ。
(博物館、美術館、動物園、水族館、科学館、寺社仏閣、その他_____)
- H その他
(ショッピング、ドライブ、写真、旅行、温泉、ゲーセン、その他_____)

(2) 前のページの(1)のうち、最も楽しいものは何ですか。

[]

(3) 趣味・余暇を共有できる人はいますか。(いる ・ いない)

(いる) 場合には、あなたとの関係 []

2 得意なこと、苦手なことについて

(1) 得意なことはありますか。ある場合は、具体的に書いてください。

(ない・ある) []

得意だと思っている理由を教えてください。

[]

(2) 苦手なことはありますか。ある場合は、具体的に書いてください。

(ない・ある) []

苦手だと思っている理由を教えてください。

[]

3 性格・特徴について

それぞれの項目に対して、どちらか近いと思う方に○をつけてください。

	内 容	どちらかに○
①	相手の話を聞くよりも自分の話をする方が好きである。	思う ・ 思わない
②	冗談や皮肉がわかる方である。	思う ・ 思わない
③	一人でいるより、大勢でいる方が好きである。	思う ・ 思わない
④	相手の気持ち、周りの空気を読める方である。	思う ・ 思わない
⑤	約束やルールに厳密である。	思う ・ 思わない
⑥	初めてのことや予定変更があると、落ち着かない方である。	思う ・ 思わない
⑦	ひとつのことに夢中になると、切り替えが難しい方である。	思う ・ 思わない
⑧	思いついたらすぐに行動する方である。	思う ・ 思わない
⑨	気が散りやすい方である。	思う ・ 思わない
⑩	忘れ物、なくし物は少ない方である。	思う ・ 思わない
⑪	何をするにも自信がない方である。	思う ・ 思わない
⑫	些細なことに対しても、不安や緊張を強く感じる方である。	思う ・ 思わない
⑬	感情をコントロールできる方である。	思う ・ 思わない
⑭	音、匂い、味、触感など苦手な感覚がある。	思う ・ 思わない
⑮	他者からのアドバイスを受け入れられる方である。	思う ・ 思わない
⑯	困った時に自分から援助を求められる方である。	思う ・ 思わない

4 これまでの学校生活について

(1) 小学校生活は、楽しかったですか。

(とても楽しかった・楽しかった・あまり楽しくなかった・楽しくなかった)

(2) 小学校生活で、印象に残っている出来事を教えてください。

(3) 中学校生活は、楽しかったですか。

(とても楽しかった・楽しかった・あまり楽しくなかった・楽しくなかった)

(4) 中学校生活で、印象に残っている出来事を教えてください。

(5) 中学校卒業後の進路を教えてください。

複数当てはまる場合は、全てに○をつけてください。

①高校
高等学校 特別支援学校 サポート校・その他 ()

②高校以降
大学 (学部) 短期大学 (学部)
大学院 (専攻) 各種専門学校 ()
その他 ()

(6) 中学校卒業以降の学校生活は、楽しかったですか。

(とても楽しかった・楽しかった・あまり楽しくなかった・楽しくなかった)

(7) 中学校卒業以降の学校生活で、印象に残っている出来事を教えてください。

(8) 所属していた部活動やサークル活動について教えてください。

例：(鉄道研究会) 活動期間：(中学1) 年生～(大学3) 年生
() 活動期間：() 年生～() 年生
() 活動期間：() 年生～() 年生
() 活動期間：() 年生～() 年生

5 通級指導教室について

- (1) 通級指導教室について覚えていることがあれば教えてください。
(活動内容や学んだこと、友だちや先生との思い出など、自由に)

- (2) 通級指導教室に通ったことは、あなたにとってよかったですか。

(思う ・ わからない ・ 思わない)

- (3) 通級指導教室で学んだことで、今までの生活に役立っていると思うことはありますか。役に立っていると思うことがあれば教えてください。

6 現在の生活について

- (1) 現在の進路の決定に際して、参考にしたことはなんですか。
①～⑥の当てはまるものの番号全てに○をつけてください。

- ① 進路先の情報 (規模、業績や社風、実績と校風、交通の利便性)
 - ② 就きたい仕事から考えた
 - ③ 他の人の進路を参考にした (親・兄弟・友人・先輩・先生など)
 - ④ 相談者からの助言 (親・兄弟・友人・先輩・先生など)
 - ⑤ 自分の学業成績
 - ⑥ その他 ()

- (2) 現在のあなたの生活の満足度について教えてください。各項目の満足度について、
() の中からもっとも当てはまるもの1つに○をつけてください。

- ①友人関係 (満足 ・ やや満足 ・ 少し不満 ・ 不満)
- ②家族関係 (満足 ・ やや満足 ・ 少し不満 ・ 不満)
- ③学校・職場の人間関係 (満足 ・ やや満足 ・ 少し不満 ・ 不満)
- ④学業・仕事の内容 (満足 ・ やや満足 ・ 少し不満 ・ 不満)
- ⑤学業成績・給料 (満足 ・ やや満足 ・ 少し不満 ・ 不満)
- ⑥生活全般 (満足 ・ やや満足 ・ 少し不満 ・ 不満)

7 ストレスへの対処について

(1) 誰でもストレスは感じるものです。次のようなことであなたはストレスを感じますか。それぞれの項目に対して、どちらか近いと思う方に○をつけてください。

	内 容	どちらかに○
a	人と会話をすること。	感じる ・ 感じない
b	冗談や皮肉を言われること。	感じる ・ 感じない
c	自分の思いや考えが周りに理解されないこと。	感じる ・ 感じない
d	集団や周りの人に合わせて行動すること。	感じる ・ 感じない
e	相手の気持ちや周りの空気を読む必要がある時。	感じる ・ 感じない
f	約束やルールが守られていないこと。	感じる ・ 感じない
g	環境の変化（進学、就職、転居など）や予定変更。	感じる ・ 感じない
h	やっていることを途中で止めなければいけない時。	感じる ・ 感じない
i	やりたいことがすぐにできない時。	感じる ・ 感じない
j	仕事や勉強で、集中し続けなければならない時。	感じる ・ 感じない
k	物を管理すること、整理整頓すること。	感じる ・ 感じない
l	計画を立てること、スケジュール通りに進めること。	感じる ・ 感じない
m	自分の予測と結果が異なる時。	感じる ・ 感じない
n	他者から期待されること。	感じる ・ 感じない
o	音、匂い、味、接触など、苦手な感覚に関すること。	感じる ・ 感じない
p	生活リズムが乱れること（食事・睡眠等）。	感じる ・ 感じない
q	他者からアドバイスを受けた時。	感じる ・ 感じない
r	自分から援助を求めなければならない時。	感じる ・ 感じない
s	金銭に関すること。（小遣い、給料、貸し借りなど）	感じる ・ 感じない
t	自然災害（地震、津波等）、社会的現象に関すること。	感じる ・ 感じない
	その他 ()	

(2) ストレスを感じた時に落ち着くための対処法をいくつか教えてください。

例： 寝る、 相談する、 食べる、 音楽を聴く、 叫ぶ など

8 相談者、理解者について

(1) 困った時に相談する人はいますか。 (はい ・ いいえ)

(はい) と答えた方、それは誰ですか。

当てはまるもの全てに○をつけてください。

- | | | | | | | |
|--------------|-----------|----------|-------------|--------|-----|-----|
| ①母 | ②父 | ③きょうだい | ④祖母 | ⑤祖父 | ⑥親戚 | ⑦友人 |
| ⑧先生 (恩師) | ⑨先輩 | ⑩後輩 | ⑪上司 | ⑫職場の先輩 | ⑬同僚 | |
| ⑭主治医 | ⑮恋人・配偶者 | ⑯サークルの仲間 | ⑰スクールカウンセラー | | | |
| ⑱関係機関のカウンセラー | ⑲塾、習い事の先生 | | | | | |
| ⑳その他 (| | | | | |) |

(2) 今までにどんなことを相談しましたか。

当てはまるもの全てに○をつけてください。

- | | | | |
|-----------------------------|------------|-----------|--|
| ①友人関係 | ②家族関係 | ③進路・職業選択 | |
| ④自分の性格や言動 | ⑤金銭にかかわること | ⑥将来のこと | |
| ⑦学校生活のこと (人間関係・成績・その他_____) | | | |
| ⑧仕事上のこと (人間関係・業績・その他_____) | | | |
| ⑨体調管理や健康 | ⑩ストレスへの対処 | ⑪恋愛・異性のこと | |
| ⑫その他 (_____) | | | |

9 「自分」について

(1) 自分自身が最も成長したと思うことを教えてください。

[_____]

(2) 今の自分を好きですか。

(とても好きだ ・ 好きだ ・ あまり好きではない ・ 好きではない)

(3) 周りから頼りにされた経験、役に立った実感をもっていますか。

(はい ・ わからない ・ いいえ)

(4) 言われて嬉しい言葉を教えてください。

[_____]

(5) これだけは許せないという言葉や事柄を教えてください。

[_____]

(6) あなたが尊敬する人はいますか。 (はい ・ いいえ)

(はい) と答えた方、それは誰ですか。

例1 (著名な人の場合): 坂本龍馬、イチローなど、個人名で記入

例2 (身近な人の場合): 先輩、両親、先生など、続柄や関係で記入

[]

(7) あなたが大切にしていることやものを教えてください。

[]

10 将来の夢、未来の姿

(1) 現在のあなたには、将来の夢がありますか。 (はい ・ いいえ)

(はい) と答えた方、その夢は何ですか。

お忙しい中、アンケートにご協力をいただきまして、

誠にありがとうございました。

このアンケート内容につきまして、後日インタビューを行うことを考えております。
ご協力いただけるでしょうか。①～③のいずれかに○をつけてください。

- ① 協力できる
- ② 協力してもよい
- ③ 協力できない



①或いは②と回答していただいた方は、お手数ですが次ページにお名前と連絡先をご記入くださるようお願いいたします。

*実際にインタビューにご協力いただく場合には、①或いは②と回答していただいた方の中から数名になります。

〈ご連絡先〉

ふりがな お名前	
住 所	〒 ()
電話番号	
(メールアドレス)	
連絡の時間帯	

*なお、ご記入いただいた内容につきましては、インタビュー実施に際してのご連絡の目的以外には使用いたしません。また本調査終了時に、全てを確実に破棄処分いたします。

これで全て終了です。ありがとうございました。

同封の返信用封筒（切手不要）に入れ、

7月31日（火）までに、返送をお願いいたします。

〈横浜市小学校通級指導教室追跡調査研究会〉

連絡先

〒241-0831

横浜市旭区左近山1997-2

横浜市立左近山第一小学校

通級指導教室担当：永野和子

電話：045（351）7861

【資料2】

<インタビュー協力者からのメッセージ>

インタビューの最後に、「通級指導に望むこと」「現在利用している人たち、関係者に伝えたいこと」について尋ねた。以下に掲載したメッセージは、彼らの言葉をできる限り忠実に記録したものである。

1) 通級指導教室に望むこと

「自分が午後から通級に行くことでいじめられた経験があるので、1日学校を休んでいく方がいいと思う」

「場所が遠いので移動が大変だった。授業を抜けたり、途中で入ったりするのも大変だった。在籍校の授業の抜けた部分の保証があるといいと思う。自分もそうだけど、自分と他者をしっかりと区別して（対応してほしい）」

「中学の時、通級に通っていることがみんなとの違いになった。通級に通っていてもみんなが理解できる環境、差ができないような配慮がほしい」

「小集団で密な人間関係については学ぶことができる。しかし学級など大きな集団に溶け込む方法を教えることは難しいので、学級集団に溶け込む方法を教えてほしい」

「自分は勉強のことは苦労しなかったが、通級に通うことによって勉強が遅れてしまうタイプは、授業を抜けて行かなくて済むならその方がいいと思う」

「『生徒が相談してきたときに、いいかげんに答えないでほしい』生徒が悩んでいるときや困っているときに、先生なので間違ったことを教えてはいけないから。」

「生徒が相談してきたとき、時間を先延ばしにしないでほしい。時間がたつと、いろいろ状況が変わっているかもしれないから。」

「教えてほしいことは、『通級っていう場所があって、通級は生徒たちの味方だよっていうことを教えてほしい』教える内容というよりどっちかっていうと『願い』です。生徒の環境づくりをしてほしい。それがわからないで、自分は孤独だって思っている人がいると思うから。まずは、知らせることをしてほしい。生徒の心に余裕ができて、力強くなって、心強くなって、その人の道が開けるかもしれないから。こんな若造の言うことで、申し訳ないけど」

2) 通級している後輩・保護者・指導担当者に対して

「私もいろいろあったんで、いろいろと苦労すると思うけどがんばって。」

「何でもいから好きなものを貫き通せ！」

「(今、座れない子や先生に一言) そのうち、座れるようになる。時がたてば言うことを聞くようになる。」

「自分を知ること、自分の悪い部分に気づくことが大切。そうしないと人のせいばかりしてしまう。」

「普段の生活の中で深く考えない方がいい。大きな波が来た時に考えればいい。いじめられている子も気にしなければいい。気にするだけ損。自分も中学の時にいやなことをされてきたらしい。(自分ではあまり意識がなかった。人に言われた。)何も反応しなかったら、なくなった。下手な返しをするより何も反応しない方がいい。今考えると、相手はおもちゃがほしかっただけ。」

「本来の学校で、できないこと、自分をさらけ出せない子がいたら、通級で自分を主張する場があってもいい。それが、いやな子もいるけど。」

「今、わからなくても、先生たちの努力があって自分も成長したので、そういう経験を話してほしい。小中学生の頃に、友達をいっぱい作っておけばよかった。」

「子どもの好きなことを親も容認してあげなくちゃいけない。はじめのためにある程度の制約は必要だけど。自分は、平日のゲームはダメで、土日はいくらでもOKだった。はじめをつけられるようになったら、いつでもOKになった。容認のしっぱなしはよくない。そうしたら、引きこもりになる。」

「子どもがどうであれ、あきらめないで。障害のある子でもできることはたくさんある。障害があるからこそできることもある。可能性を信じて無理だと思ったらおしまい。」